

シンポジウム

『グローバル人材』育成に資する大学英語教育を考える—ビジネス現場の視点から

第 22 回 JASEC 年次大会シンポジウム

2013 年 11 月 2 日 於：早稲田大学

宮 崎 修 二

(東邦ガス)

1. はじめに

今日、日本の経済・社会の国際化が進展する中、国際ビジネスを遂行する上で外国語、特に英語の運用能力はますます重視されており、大学の英語教育に対する期待感も増大している。しかし、様々な地域や言語圏—その多くには新興諸国など非英語圏が含まれる—において日本の国際企業がどのようにして意思疎通を図りながらビジネスを遂行しているのか、とりわけ、どのような問題点に遭遇し、どのように対応しているのか、といった事情は一般には十分に紹介されていないように感じられる。本シンポジウムでは、これらの点に関する理解を深め、大学における英語教育が「グローバル人材」育成にどのように貢献すべきかについて、国際ビジネスの実務経験をお持ちの山口岳男氏（日立製作所）、宮田泰平氏（三井物産）及び野村優氏（COACH JAPAN）、さらに大学における英語教育に携わる立場から奥田隆一教授（関西大学）の 4 名のパネリストによる議論を通じて、検討を行った。

2. シンポジウムの展開

議論は、2 つのパートで構成した。まず、ビジネスに携わるパネリストからは、所属企業・組織におけるグローバル事業の現況と国際的なコミュニケーションの実態について具体的かつ実際に報告をいただいた。奥田教授からは、日本の学校英語教育の現状について、その抱える課題に係る事例も含め、詳細にご報告いただいた。次に、各パネリストのご発表も踏まえ、ビジネス界からは、グローバル化に向けた人材の確保・育成プログラムのありかたについて、また、これからグローバルな活躍を目指す大学生に求めるものについて明らかにしていただいた。さらに、奥田教授からは、こうしたニーズをどのように日本の大学における英語教育に生かしていくかの方向性について、ご示唆をいただいた。その後、フロアからの質疑応答を行った。

3. 所感

各パネリストの発言の詳細は、それぞれまとめられた発表概要に紙面を譲ることとしたが、4 氏の議論を通じ、司会者として、いくつかの感想等を得たので、以下にまとめてみた。

・一口にグローバルビジネスといっても、業態（製造業か商業か）、グローバル化の進展度合い（国際、国内のウェイト）、企業の出自（外資系か否か）、といった点で事情は千差

万別であり、個々の人材の役割（営業か技術開発か）、守備範囲（国内か国際か）でも異なるので、「グローバル人材」一般を典型的に想定して議論するのには無理があること。

- ・したがって、各企業の人材に求められる英語力の水準や広がり、内容も異なると考えられ、一律な対応策を考えるのは難しいこと。
- ・非外資系企業では、一定の基準に基づく英語運用能力は求められるものの、それぞれのビジネスに固有の適性（商社であれば商いの）有無の方が重要との印象を得たこと。換言すれば、英語なり外国語は意思を伝えるコミュニケーションの手段であり、やはり何を伝えるか、のコンテンツが重要なのではと感じたこと。
- ・外資系企業では、より高度な英語運用能力が求められていると考えられるが、現場で求められる英語力の基本は「読み、書き」であり、外資、非外資を問わず、こうした基礎力を涵養することが、オーラルやリスニングの向上にも不可欠という指摘があったこと。近時、グローバル人材の育成をオーラルの運用能力とイコールだとする向きが政府部内はもとより、教育関係者にも見受けられるが、そのような単純な議論で本質を見誤ってはならないと再認識したこと。
- ・さらに、コミュニケーションツールとしての英語力もさることながら、リベラルアーツとも言うべき人間としての知的総合力の涵養こそ、グローバル時代を担う次代の人材にとって重要だとの指摘もうなずけるところであること。
- ・一方、大学生の基礎的な英語運用能力の現状には、想定を超えて危ういものがあると感じられたこと。種々の原因があると考えられるが、やはり、わが国で生活する日本人の学生にとって、普段から英語でコミュニケーションすることの必要性（不可欠性）は低く、そのため、英語運用能力涵養の必要性も相対的に低くなっているのではないかと感じたこと。
- ・巢立っていく社会、企業の態様が千差万別である以上、一般論でなく、各人の望む特定の進路と、そこで求められる英語能力の水準を具体的、現実的に考慮して、各人が努力するという気構えが重要なのではないかということ。

4. 今後に向けて

筆者も大学の学部レベルのニュース英語の授業を持っているが、いつそれを活用するか分からない英語の運用に関する知識を網羅的に詰め込んだとしても、学生諸君における定着の歩留まりは余り高くないのではと常々感じていたところである。要は、奥田教授が指摘されたように、今、世界で現実には起きている種々の問題に関心を持ち、それに関する情報を広く世界に求めて英語で見聞し、考え、議論するといった努力、そうしたプロセスを通じて、各人が自らを拓き、耕す努力が日本の学生に求められているのではないだろうか。学生諸君に、まずは、やればできるという自信を持たせつつ、各パネリストが指摘されるような「人間力」、「総合力」の涵養に取り組んでもらうよう、方向付けすることが重要ではないかと改めて感じた次第である。